

英米文化の背景

「英米人の迷信・俗信」考(12)Ⅳ 年中行事

—その1 大晦日の賑わい・元日の初客・一年の計は元旦にあり・ 十二夜とシェイクスピア劇・顕現の十二日節

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2003年9月30日 受理)

はじめに

人々は太古の昔よりいろいろな祭を行ってきた。その中には廃れていった祭もあれば、益々盛んになる祭もある。祭は、太陽、山、海などの神そのものへの人々の畏敬の念や、自然の恵み、農産物、海産物などを入手できることへの神への感謝の念から始まったものであるが、人々は日や期間を特定して祭の日、つまり祝祭日を創り出したのである。

なぜ人々は祭を行うのか、という素朴な疑問に対しては、人々の毎日の暮らしはともすると単調になりがちであり、その単調さにリズムをつけ、人々の心と体に活気を与え生活を引き締める必要があるためである、という答えに行きつくであろう。人が祭に参加することは、人々と喜びを分かち合うことになり、それは人間の社会生活において意義深いことである。祭への参加は、その共同体社会の人々の伝統、ひいては民族の伝統を引き継ぐことを意味する。この点において、当稿で英米の祭についてそれぞれの習慣、伝統等を扱う際に、その史的かつ文化的な背景に目を向けることに留意したいものである。

英米の祭、祝祭には、村のような小共同体社会を単位にした独特なものも多く見られるが、当稿では、英米で一般的に見られる祭、祝祭を扱うこととする。その習慣、伝統等のみならず、それに纏わる多様な迷信、俗信を挙げ、若干の文芸用例をも加味しながら考察を試みたい。

1 大晦日 New Year's Eve の賑わい

一年の最終日12月31日の特に夜半には、英国でも米国でも一般に賑やかな時が過ごされる。多くの場合、飲み騒いだり舞踏会などが催され、若者を中心に陽気な楽しい騒ぎで真夜中を迎える。例えばロンドンでは、トラファルガースクエアとかセント・ポール寺院に人々が群がる。大人たちは多くの者が飲酒の浮かれ気分であり、時計が午前0時を打つと一瞬の沈黙があった後、すぐさま拍手喝采が沸き起こり、誰もが腕を組み手をつなぎ“Auld Lang Syne”「蛍の光」の大合唱が始まる。この歌は約2百年前にスコットランドの詩人 Robert Burns によって作詞されたものであるが、もともとこの地の伝統的なメロディに言葉がつけられたものと言われる。このとき人々の間では、周囲のだれかれとなくキスをすることが許されることになってい

る。

この大晦日の一種の狂気じみた浮かれ騒ぎについて、Tad Tuleja は宗教史家 Mircea Eliade の「多くの原始民族の新年の祝賀行事は、『昔々の』原始時代の混沌状態から新たに歴史を始めようとする試みである」との考えに基づき、All in all, the inspired madness of the contemporary New Year's Eve reflects precisely the hope of the primitive: the hope that tomorrow will be different. (全体として見て、現代の大晦日の鼓舞された狂気の行動は、まさしく原始の人々の希望、つまり明日は明日で違ったものになるだろう、という希望を表している) と説明している。¹⁾ この考えは根本的には肯定できるものであろう。しかしながら、現代人の現実の浮かれ騒ぎは「新たな切り替わりへの期待感からくる」というよりも、「ストレス解消のための騒ぎそのものに過ぎない傾向が強い」と感じられるかもしれない。

大晦日の伝統は古代スカンジナビアの冬の祭典に関連があるとされ、冬を過ごす人々は「太陽にまた戻ってきてほしい」との強い願いから、太陽の象徴である「火・灯り」を用いた祭を行ったとされる。その名残の一つは、KincardineshireのStonehaven で大晦日の夜、漁師たちの間で、針金細工の球を作りその中にパラフィンをしみ込ませたロープの切れ端やぼろ布を詰め込み、それに火をつけて、頭上で火の球を振り回しながら町じゅうを練り歩く習慣に見られる。²⁾

2 元日 New Year's Day の初客 First-foot

英米人のなかには、正月にはさほどお祭り気分を示さない人々も実際上いる。例えば、英国でも南部の地域では、元日でも特にめでたいという雰囲気は乏しく、年始回りをする習慣もなく、正月らしい飾り付けをすることもない。ロンドンでも人々の顔にも特に改まった様子もなく、会社も商店も平常通りの営業をしており、街も平静そのものである。

これとは対照的に、イングランド中部、北部、そしてスコットランドでは、まさに伝統的な正月行事が行われる。親戚や知人を訪問して挨拶をしたり、あるいは彼らを食事に招いて新年を祝う習慣がある。これらの地域では、元旦つまり元日の朝、実は大晦日の夜半を過ぎた頃から、親戚知人の家に年始回りを行う。この習慣は初訪問 first-footing と言われ、その訪問客のことを初客 first-foot と称する。この習慣はスコットランド人が考え出したものと推測されている。³⁾ この初客に関しては次のような俗信がある。

☆「初客は男性でなければならない。」初客には女性は好まれない。

☆「初客の男性の髪は黒髪でなければならない。」一般に、黒髪の男性は「幸運をもたらす人」'lucky bird' と呼ばれる。金髪や赤毛は不幸をもたらすとして喜ばれない。ただし、初客の髪の色好みについては、必ずしも一定してはいない。例えば、スコットランドの東部地方や East YorkshireやLincolnshire のそれぞれの一部の地域では、金髪の男性のほうが好まれる。また、West YorkshireのBradford 辺り、及びスコットランドの Aberdeenshire の一部では赤毛の初客が歓迎される。しかしこれら以外の地方では、赤毛は極度に嫌われる。赤毛が嫌われ

る理由は、イエスを裏切ったユダが赤毛であったと伝えられることや、古くから赤毛がタブー視されていたことが理由のようである。⁴⁾

☆「初客は独身男性がよい」とされる。ただし、既婚男性がよいという考え方もある。

☆「扁平足の初客は悪運をもたらす。」これはスコットランドを中心に言われる。これは別の言い方で、「足の甲が非常に高く土踏まずが盛り上がり『その下を水が流れる』ような足型の男性が最高である」とも言われる。⁵⁾ そういう初客ならば奴隷の家系者でない証拠だとされる。(初客に関する記述内容ではないが) これに関連のある文芸用例として Charlotte Brontë, *Shirley* (Yorkshire が舞台の小説、1849) に次の記述が見られる。

...all born of our house have that arched instep under which water can flow — proof that there has not been a slave of the blood for three hundred years.⁶⁾

、、、この家に生まれた人間は皆、水が土踏まずの下を流れてゆけるくらい、足の甲が高く曲がっているんだーこの三百年間奴隷の血が混じっていない証拠なんだぞ。

☆「初客には、やぶにらみの者、足を引きずる者、母斑のある者、眉根がつながっている者等は敬遠される。」また、「黒い服を着てくる者、ナイフや先の尖った道具を持ってくる者も嫌われる。」さらに「ケチだとの評判のある初客は特に好まれない。」また、「理想的にはそこにいる全員にとって、その初客が見知らぬ人であればありがたい」とも言われる。

☆「初客は玄関から迎え入れ、帰りは裏口から送り出すもの」とされる。入口と出口が別とされるのは、年が過ぎ去って行くことを象徴的に表すため、と考えられている。

初客は訪問の際にお年玉 *handsel* を忘れてはならない。

☆「手ぶらでやってくる初客は、その家に一年間の貧窮をもたらす」と言われる。

☆「初客は石炭をひとかけら、パンを少々、塩またはコインを1枚必ず持参すべきである。」今日では、これらの物に加えて、果物とか紅茶を一缶あるいはウイスキーを一瓶持っていくのが普通の習慣のようである。因みに、石炭はその家に「暖」を、パンは「食物」を、塩やコインは「幸運や金運」をもたらす、と考えられるためである。

初客は部屋に通されるとすぐに、口を利かないままに持参した石炭を暖炉にくべ、時に火を掻き立てたりした後に食卓の上にパンを置き、家の主人のためにウイスキーをグラスに注ぐ。こうしておいてから、初めて初客は家人一同に年頭の挨拶 “A Happy New Year!” を述べる。それまでは初客も家人も、互いに黙ったままになっているのが仕来りとなっている。

ところで、もしも初客がなかった場合はどうするのか、についてであるが、

☆「初客が来なかった場合は、その家の主人が元日の早朝に、石炭をひとかけら自分の家に持ち込まねばならない」とされる。

また初客については次のようなことも言われる。

☆「男性の初客を家に招じ入れたのが未婚女性であれば、彼女の未来の結婚相手はその初客と

同じ洗礼名を持つ男性である。』

新年の初めには、友人や隣人に「新年の贈り物」‘tokens’（スコットランドでは‘hogmanays’）をする習慣がある。その場合、一般的には幸運をもたらす贈り物として、チョウジノキと、マンネンロウカヒイラギの小枝を差したりんごがよく用いられる。これについても地域による違いが見られ、例えば、Yorkshire では切り取ったばかりの常緑樹の小枝とか、スコットランド各地では小麦の束とか薫製のニンシが贈り物にされたりする。

新年の贈り物は新年の豊饒を象徴するものであり、その豊饒を念じる余り大いに盛んに行われ、18世紀まではクリスマス時のそれを凌ぐ程であったと言われる。⁷⁾

ウェイルズやウェイルズとイングランドとの国境地方には、「井戸の初水汲み」‘Creaming the Well’ と呼ばれる習慣が今日でも若干残っている。これは元日の最初に汲んだ若水 New Year's Water のことであるが、中でも聖なる井戸や泉からの初水は珍重される。ウェールズの南部では、初水が訪問先の家の中、家人、ドアなどに振り掛けられる習慣がある。⁸⁾

☆「聖なる泉の初水を手に入れた者は、年内に結婚できる。あるいは幸運に恵まれ、美人になる」と信じられ、かつては特に若い女性たちの間でその入手が競われたりした。さらに女性奉公人などの中には、初水を女主人に売ったりする者もあったと言われる。スコットランドでは、初水は「井戸の華」‘Flower of the Well’ と呼ばれ、それで酪農具を洗ったり、乳の出がよくなるようにとそれを乳牛に飲ませたりしていた、と言われる。

3 一年の計は元旦（元日）にあり

人々は古い年とのつながりを断ち切り、新しい年を幸運なものにしたいと願う。こうした願いは「元日の決意」‘New Year's Resolutions’ の形で見られ、今も広く行われている。その典型的な例の一つに、「日記を書き続ける決意」などが挙げられるようである。

英米でも、他の文化圏におけると同じように、元日に起こる事柄はその一年間の出来事の雛型である、という考え方がある。

☆「食べ物とは絶やさないで（戸棚等に）保管しておくこと。」

☆「暖炉の火は決して絶やしてはならない。」

☆「早起きをするのがよい。」

☆「仕事において実り多い一年を保証するために、職業についている者は自分の仕事を反映するようなことを何らかの形でするのがよい。」ただし、元日に何か重要な仕事をしなければならないのは極めて不運である、と考えられている。

☆「元日に新しい衣服を身に着ければ、年内に新しい衣服が手に入る。」

☆「元日に洗濯をしてはならない。」これを敢えてすれば、家族の誰かが年内に「洗い流される（死ぬ）」恐れがある、とされる。⁹⁾

☆「教会の鐘を高らかに鳴らして新年を迎え入れるとよい」とされる。大晦日の真夜中に大きな声で叫んだり、歌ったり、大騒ぎをすることは、このことにつながりがあるようである。

かつては、この行為には単なる浮かれ騒ぎ以上の意味があるとされた。各種の賑やかな物音は、悪魔や悪霊を追い払い、新年のよいスタートを切ることができると考えられた。¹⁰⁾ 次は、「新年になった瞬間の賑やかな物音」についての James Kirkup の記述であるが、Opie & Tatem, *Dictionary of Superstitions* にも引用されているものである。

... everyone sits up until after midnight "to see the New Year in." I was generally too sleepy to stay awake, ...I would go to bed, to be wakened at midnight by bells and maroons and hooting sirens and laughter and shouting and singing in the streets.¹¹⁾

「新年が始まるのを見ようと」誰もが真夜中過ぎまで起きている。私はたいてい眠くなって起きておれなかった。、、、私はよく床についたものだが、真夜中に鐘や蒺藶玉、鳴り響くサイレン、それに通りの笑い声、叫び声、歌声で目を覚まされたものだった。

☆「幸運を保つために、旧年が完全に終わってしまうまでは過ぎ行く年を悪く言わないように心すべき」とされる。¹²⁾

☆「幸運を祝って乾杯する際には、口を開けた瓶は必ず飲み干すべき」と信じられる。

☆「元日には、たとえ隣人でも物を貸すな。特に暖炉の火種は決して貸してはならない。」

☆「元日には、台所の捨て水やごみでさえも捨てるものではない。」かつての主婦たちは、次の日(1月2日)になってからこれらを捨てたものである。

元日は一年の運勢を占う好機であり、新聞紙面は星占い師の欄で賑わう。今日でも一部の古風な人々は聖書を手に取り、目を閉じて手当たり次第に開き、目に留まった最初の聖句で一年を占ったりする。¹³⁾ また、かつては、(次の2項のように)風向きに注目して一年を占う者もあったとされる。¹⁴⁾

☆「北から風が吹いたら、その年の天候はよくない。南風なら晴天と順調なときが待っている。東から風が吹けば、飢饉かあるいは他の災害がやってくる。西風ならミルクと魚が十分に供給される。だが、極めて有名な人物の死に遭遇することになるであろう。」

☆また、「元日に風が吹かなかった場合は、すべての者にとって喜ばしい繁栄の年が期待できる」とされた。

こうしてみると、「一年の計は元旦(元日)にあり」との考えは、英米でも、その一部は今なお続いているように思われる。

4 十二夜 Twelfth Night とシェイクスピア劇

クリスマス後の12日目(1月6日)は十二日節と呼ばれ祝われるが、その前夜が十二夜(1月5日)である。かつては十二夜の当夜には屋内でお祭り騒ぎの祝宴を催したり、賭け物での罰金遊びに興じたり、仮想劇 *disguising* や William Shakespeare 作の同名の喜劇 *Twelfth Night* が楽しく演じられたりした。このシェイクスピアの *Twelfth Night* は1601年に宮廷での饗宴の余興

のために書かれたものだとされる¹⁵⁾が、これが大いにうけて、庶民のこの夜の余興として楽しい出し物となっていた。下記の引用は、同劇が上演されたとき、民衆に特に面白がられた場面の一つである。物語の主筋ではないが、いたずら者たちに仕組まれて、偽手紙を読んだ堅物の執事 Malvolio が、その手紙の文面通りの出で立ちで、全くその気もない Olivia 姫に自分の思いを語る滑稽な場面である。

Mal. ...this does make some obstruction in the blood, this cross-gartering; ...

Olivia. Why, how dost thou, man? What is the matter with thee?

Mal. ... It did come to his hands, and commands shall be executed. ...

Olivia. Wilt thou go to bed, Malvolio?

Mal. To bed? Ay, sweetheart, and I'll come to thee.

Olivia. God comfort thee! Why dost thou smile so, and kiss thy hand so oft? ¹⁶⁾

マルヴォーリオ「…これは血の循環を悪くいたします、この十文字の靴下留めは。…」

オリヴィア「何だって、お前は？ いったいどうしたというの？」

マル「…確かに拝見いたしました。ご命令は実行いたしております。…」

オリ「寝た方がいいんじゃない、マルヴォーリオ？」

マル「寝る？ ああ、ごもっとも。あなた様のもとへまいりますとも。」

オリ「かわいそうに！ なぜそうニヤニヤ笑って自分の手に何度もキスをするの？」

この箇所のみならず、恐らくは当劇中のこの「場」‘Scene’ 全体が、観客たちの笑いと飛び交う囁き言葉の中で、その場の人々に大変な愉快さを提供したものと推測されうる。

庶民のこの賑やかな催しの司会進行役を務めたのが、「ソラ豆の王様」‘King of the Bean’ と「エンドウ豆の女王様」‘Queen of the Pea’ と呼ばれる人物である。この夜客人たちに振る舞われるトゥウエルフス・ケーキ Twelfth Cake は、あらかじめソラ豆やエンドウ豆（あるいはコイン等）を入れて焼かれてあり、それが客人たちに切り分けられたとき、その中にそれらの豆を見つけた男女がその役を務めた。¹⁷⁾ その際、もしも女性が自分のケーキの中にソラ豆を見つければ、彼女に王様を選ぶ権利が与えられ、また、エンドウ豆を見つけた男性には女王様を選ぶ権利が与えられたようである。

十二夜の賑やかな行事はやがて18世紀になると衰え始めるが、反面、ケーキは一層立派な物となっていく。しかし、このケーキもヴィクトリア朝後期末まで続いた後、クリスマス・ケーキに取って代わられたようである。このケーキの慣習は今日ではほとんど見られないが、今も残っている一例が、ロンドンのドルアリー・レイン劇場 Theatre Royal, Drury Lane に出演中の役者全員に配られるパッドリー・ケーキである。これはかつて1794年のこと、出演中に倒れた役者ロバート・パッドリー Robert Baddeley によって遺贈されたケーキであるが、それ以来毎年、この行事は1月6日に行われている。¹⁸⁾

今日では、一部の人々の間での習慣を除き、前述のようなかつての十二夜のいわゆる民俗的な賑やかな祭の催し事は、その大部分が消えかかっている、とみてよいであろう。

5 顕現の十二日節 Twelfth Day (= 顕現日 Epiphany)

1月6日はクリスマス季節の最後の日(特にスコットランドでは、アップヘイリデー Uphalieday と称される日)であり、旧暦(ユリウス暦)のクリスマスに相当する。この日は一年の再生を祝う祭儀の日であり、かつこの日は農神サトゥルナリア Saturnalia 祭にも相当する。また一般にはこの日は、クリスマスの飾り付けを片づける日として記憶されている。

☆「クリスマスの飾り付けは、十二日節を越えて残しておいてはならない。」それを残しておくことは不吉なものとされた。¹⁹⁾ また「この日より早く飾り付けを片づけるのも不吉である」とされた。これは家族の繁栄を投げ捨て、家族の一員の命さえ棄てることを象徴する、と考えられた。ただし、この考え方には数世紀かけての変遷があった模様であり、かつては聖燭祭 Candlemas (2月2日)までは飾り付けを残しておいてもよい、とされていたようである。²⁰⁾

☆「飾り付けのうち、常緑樹の小枝は捨てないで焼却すべき」とされる。これを焼却すれば家族の誰かの死を招く、と言われた。ただし、これに関しては全く逆のことも言われ、「焼いてはならない」との信もある。両者に共通している点は、「まだ枯れていない常緑樹の小枝は焼いてはならない」という点である。

☆「ヒイラギ holly、ツタ ivy、ヤドリギ mistletoe、イチイ yew の小枝は、次の年のクリスマスまでとっておくべきである。」そうすれば一年間の家族の運を守ってくれる、との人々の信仰が今日も広くみられる。

民俗的な催しとは別に、教会では、1月6日は古くから顕現日または主顕祭 Epiphany として今日も重視されている。Epiphany の語源はギリシャ語の *epipháneia* で、manifestation, appearance of a divinity (神性の顕れ) の意であり、²¹⁾ それはベツレヘムに生まれたキリストが、東方から来訪した3人の王 Three Kings と、彼らによって代表される異邦人の前に初めて神性を顕したのを記念する日とされる。この日は、キリスト降誕を祝うようになる以前から祝われており、長い間にわたりクリスマスよりも重要な祝日とみなされていた。現在でも各地の教会で特別な礼拝式が行われ、東方からの3博士 Magi によるキリスト訪問を象徴して、黄金 gold・乳香 incense・没薬(もつやく) myrrh の贈り物を捧持する祭列が組まれたりする。ここでの黄金は<王権>を象徴し、乳香は<神性>を象徴し、没薬は死体に塗る樹脂であるが<死にいたる迫害>を预示する。²²⁾

この日ロンドンのセント・ジェームズ宮殿 St. James's Palace の王室礼拝堂 Chapel Royal では、少なくとも11世紀以来続けられてきた儀式である「国王による顕現日の贈り物献上式」が行われる。この儀式では、黄金は25枚のソブリン金貨によって代用され、乳香と没薬は王室薬劑師によって調合されたものを用いる。これらの贈り物[今日の儀式では3つの財布(黄金・乳

香・没薬の象徴)に入れられた金銭とも言われる²⁴⁾がエリザベス女王の代理人である2人の式部官によって恭しく捧持されて主席司祭に渡され、司祭はそれを献じて祭壇に供える。(実は、儀式後、その金銭は適切な額に調整されて、貧しい人々のための慈善事業に寄贈されている。)²⁴⁾

十二日節は古くは異教の祝祭であったとされ、原始の人々の厳しい冬の間における「太陽、灯り、火」等への崇拝に基づくものと考えられている。その証拠として挙げられるいくつかの事柄がある。例えばその一つに、ユール・ログ Yule log (クリスマス前夜にも炉に焚かれる大きな薪)を燃やすことが挙げられよう。またシェトランド諸島に残る勇壮な火祭アップ・ヘイリ・ア祭 Festival of Fire, Up-Helly-Aa で、ヴァイキング船が燃やされることもそうである。また古くは、サクソンの農民たちの間では、豊作を願って畑でかがり火を焚き、酒盛りをする習慣があったこともそうである。なお、サクソンの農民たちのこの習慣は 'wassailing' と呼ばれ、農民たちが "Waes hall!" ("Be whole! or May you flourish!") と願ったことに由来するとされる。²⁵⁾

終わりにあたって、この 'wassailing' に関して、今日においても見られる習慣を挙げておきたい。Somersetshire の農民たちは、りんごの豊作を願って、最も大きなりんごの木にりんご酒を振りかけ、その枝には発砲して悪霊を追い払い、繰り返してこう唱える。

Apple tree, apple tree, I wassaail thee! To blow and to bear, Hat vulls, cap vulls, dree-bushel-bag-vulls! And my pockets vull too! Hip! Hip! Hooraw! ²⁶⁾

りんごの木よ、りんごの木よ、お前さんに乾杯だ！難なく実をつけるようにな、いろんな帽子も、でかい袋もいっぱいになる程にな！その上ポケットもいっぱいになるようにな！ヒップ！ヒップ！フレー！

なお、'wassail' については、To drink to the success of the apple-crop ²⁷⁾ (りんごの豊作を願って乾杯すること)の説明が見られる。

中世においては十二夜も十二日節も浮かれ騒ぎの祝祭であったが、今日ではこれらはクリスマスの飾り付けを取り外すことへの結びつきが相当に強く、気分的には「ああ、クリスマスもこれですべて終わったか、、、」と感じる人々も少なくないのかもしれない。

[次号「ヴァレンタイン祭・聖デイヴィッド祭」等続く。]

Acknowledgements:

貴重なご教示を賜った Amy Chavez 女史 (元、中国短大講師) に、心より感謝申し上げます。

Notes:

- 1) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 154.

- 2) Margaret Joy, *Highdays and Holidays* [anno. H. Funado] (Tokyo: Kinseido, 1983) 1.
- 3) "New Year," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 188(L).
- 4) "New Year," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 175(L).
- 5) "New Year," Kightly, 175(L).
...a high instep 'that water will run under' being particularly desirable in Scotland.
- 6) Charlotte Brontë, *Shirley*, IX (T. Nelson & Sons, ?) 141.
- 7) "New Year," Kightly, 174(R).
- 8) "First foot," E. & M. A. Radford *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. and rev. Christina Hole (1948; London: Hutchinson, 1961) 162.
- 9) "New Year's Day," *Zolar's Encyclopaedia of Omens, signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Schuster, 1989) 271.
- 10) "New Year," Pickering, 188(R).
- 11) James Kirkup, *The Only Child, An Autobiography of Infancy by James Kirkup* (London: Collins, 1957) 177.
[reference] "New Year din," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990) 286(L).
- 12) "New Year," Pickering, 188(R).
- 13) "New Year's Day," Zolar, 271.
- 14) "New Year," Pickering, 188(R)-89(L).
- 15) "Twelfth Night," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp.(1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer; London: Cassell, 1978) 1109.
- 16) William Shakespeare, *Twelfth Night*, 3-4, 19-33, *The Arden Shakespeare of the Works of William Shakespeare*, ed. J. M. Lothian & T. W. Craik (Methuen, 1975; rpt. London: Routledge, 1994).
- 17) "Twelfth Night," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries (Amsterdam: North-Holland, 1974) 478(L).
- 18) "Twelfth Night," Kightly, 222(R).
- 19) "Twelfth Day," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood Press, 1969) 245(R).
Bad fortune will attend any house where the Christmas decorations are not taken down on Twelfth Night.
- 20) "Twelfth Night," Pickering, 265(L).
- 21) "Epiphany²," *Dictionary of English Etymology*, ed. C. T. Onions (<New York>: Oxford UP., 1966).
- 22) "Magi," de Vries, 309(L).
Gold: gift to a king / incense: gift to a god, prayers / myrrh: persecution unto death
- 23) Joy, 3.
- 24) "Epiphany Gifts Ceremony," Kightly, 109(L).
- 25) Joy, 4.
- 26) "Wassail," *The English Dialect Dictionary*, ed. Joseph Wright (1905; Oxford UP, 1970).
- 27) "Wassail," Wright.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans — (12)

IV The Year's Celebrations

Part 1: On the Customs and Superstitions of Lively New Year's Eve, First-foot on New Year's Day, New Year's Day is the Key of the Year, Twelfth Night & W. Shakespeare's Drama, and Twelfth Day of Epiphany

Kunihiro FUJITAKA

College of Liberal Arts and Science for International Studies

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2003)

People have celebrated a variety of festivals from time immemorial. Some festivals have already died out, and others are still observed, flourishing more and more as time goes on. We know that festivals in general were begun from people's worship of gods of the sun, mountains, sea, etc. or from their gratitude to gods for receiving agricultural and marine products.

When we ask the question why people celebrate festivals, we come to a reasonable answer: as people lead a customary life every day, they are likely to become stereotyped. In order to keep their bodies and souls more active, they need some festivals in the year which will give them needed tension, much vigor, and above all, lots of pleasure.

It is believed to be very significant for people to take part in festivals in their society. Their participation means that they can have true feelings about life in common as members of the community. In a sense, they come to receive and continue the community's, or, as it were, the nation's traditions.

For this reason, we pay keen attention to examining historical and cultural aspects of festivals in the present writing in which we speculate upon the origins of customs and superstitions of various festivals in the United Kingdom and the United States of America. In addition, during this speculation, we also use examples of practical usages from English literary works.